

我が庵は、芝居の異常盤町、而も浮世を離れ里
世事で丸めて、浮気でこねて、小町桜の詠に飽かぬ、彼奴にうつかり眉毛を読まれ
法師法師は啄木鳥の、素見ぞめきで帰らりよか
わしは瓢箪

浮く身ぢやけれど

主は鯨の取り所

ぬらりくらりと今日も復、浮れ浮れて来りける

若しやと簾を余処ながら

喜撰のはなが

茶の給仕

（口説き） 浪たつ胸を押撫でて、締めなけれど鉢巻を、幾度しめて水馴棹

濡れて見たさに手を取りて、小野の夕立縁の時雨

化粧の窓の手を組んで、どう見直して胴振ひ

今日の御見の初昔

悪性と聞いて此の胸が、臘の月や松の影

私やお前や政所、いつか果報も一森と、誉められたさの身の願ひ

惚れ過ぎる程愚痴な氣に

心の底の知れかねて

自然度では

ないかないな、何故惚れさせたこれ姉女

（お罷） 自惚すぎた悪洒落な、わっちもそんなら勢肌、五十五貫でやらうなら

廻りなんしへ、ぐわらぐわら鉄棒に

路次はしまりやす

〔冷やかし〕 長屋の姉女が、鉄砲紋の半襟か、花見の煙管ぢやあるめへし、素敵に首に搦んだは、廊下蔭が油揚げさらひ、お隣の華魁へ、知らねへ顔もすさまじい

何だか高い観音さんの

鳩は五十や三重の、塔の九輪へとまりやす

料と言はれて浮いた同士

〔ちよぼくれ〕 ヤレ色の世界に出家を遂げる、ヤレヤレヤレ細かにちよぼくれ

愚僧が住家は、京の巽の世を宇治山とは、人は言ふなり

ちやちやくちや茶ゑんの咄す濃茶の縁の橋姫、夕べの口舌の袖の移り香、花橘の名小島が崎より、一散走りに走つて戻れば

内の嬢が格気の角文字、牛も涎を流るる川瀬の口説けば内へ、我から焦るる蜚を集めて手管の学問

唐も日本も廓の恋路が、山吹流しの水に照そふ旭のお山、誰でも彼でも二世の契は平等院とや、されとは是はうるさいこんだに

（歌念仏） 奇妙頂礼どら如来

衆生手だての歌念仏

釈迦牟尼仏も床急ぎ、抱いて涅槃の長枕、略言がはりのお経文

なまいだなまいだなまいだ

何故に届かぬ我が思ひ、ほんにサ

忍ぶ恋には如来まで、来て見やしやんせ阿弥陀笠、黄金の肌で有難や

なまいだなまいだなまいだ

何故に届かぬ我が思ひ、ほんにサ、ここに極まる榮しさよ

（住吉） 難波江の片葉の葦の結ばれかかり、アレサコレハサ

解けてほぐれて逢ふことも、待つに甲斐ある

ヤンレ夏の雨

やあとこせよいやな、ありやりや、これはいな、この何でもせ

住吉の岸辺の茶屋に腰うちかけて、ヨイヤサコレハサ

松で釣ろやれ蛤を、逢ふて嬉しき

ヤンレ夏の月

〔旅籠〕 姉さん音上げかへ、島田金谷は川の間、旅籠は鰐でお定まり、お泊りならば泊らんせ、お風呂もどんどんわいてある、障子も此頃張替へた

暁も此の頃替へてある

お寝間の伽をまけにして

草鞋の紐の仇解けの、結んだ縁の一夜妻、あんまり悪うも

あるまいかても

さうだろさうだろさうであろ

（結び） 住吉様の岸の姫松目出度さよ、いさめの御祈祷、天下泰平国土安穩目出度さよ

来世は生を黒牡丹、己が庵へ帰り行く